

## はじめに

本書は大学入学共通テスト（以下共通テスト）・国語の第1問（論理的文章／評論文）と第2問（文学的文章／小説）の対策のための問題集として編集されたものである。

### I 共通テスト第1問・第2問の出題傾向

「大学入学共通テスト問題作成方針」には、「学習の過程を重視し、問題の構成や場面設定等を工夫する」、国語について「問題の作成に当たっては、……大問ごとの一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題も含めて検討する」と書かれている。そして実際に、二〇二一年度から開始された共通テストにおいて、第1問も第2問も最後の問題が、その方針通り、「複数の題材」を関連づけて解答するものになっている。また、「学習の過程」を意識した「場面設定」として、本文を読んだ生徒が【ノート】や【メモ】や【文章】を作成したり、話し合ったりするという形式がとられている。

それ以外は、センター試験と同様の問題になっている。第1問では、漢字問題、傍線部の内容や理由を問う問題、本文の表現や構成について問う問題などで、これは二つの評論文（【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】）から出題される場合でも変わらない。第2問では、傍線部の内容や理由を問う問題、登場人物の心情を問う問題、小説の表現について問う問題などが出題されている。

## Ⅱ 共通テスト第1問・第2問の学習対策

第1問対策としては、まず一つの論理的文章（評論文）の内容を的確に読み解く力を養成することが重要になる。「複数の題材」を関連づけて理解する場合にも、それぞれの題材の内容が的確に理解できていなかったら、その理解は不十分なものにならないだろう。第2問対策としても、まず一つの文学的文章（小説）を読み、その内容と同時に登場人物の心情や表現の特徴を捉える力を養うことが重要になる。以上のような力を養う練習を十分に行い、その上で複数の題材を関連づけて理解する練習を行えばいいだろう。

## Ⅲ 本書の構成

本書は、第一部「論理的文章（評論文）」、第二部「文学的文章（小説）」と、二部構成になっている。そして、第一部と第二部はそれぞれ基礎編（各2題）と発展編（各6題）に分けられている。

基礎編は、一つの文章だけを題材としたセンター試験型の問題から構成されている。Ⅱで述べたように、まず、一つの記事——論理的文章でも文学的文章でも——を的確に読み解き、問題に対応できる力を養うことが基本となるからである。本書の第一部「論理的文章」と第二部「文学的文章」の最初に、〈文章を読むときの注意点と問題を解くときの注意点〉を載せておいたので、ぜひそれを参考にして、文章を読む練習と問題を解く練習を重ねてほしい。

発展編は、複数の題材が提示され、それらを関連づけて解答するものを含む共通テスト型の問題から構成されている。こちらにも、「論理的文章」と「文学的文章」に分けて、〈複数の題材を関連づけて解答する問題を解くときの注意点〉を載せておいたので、ぜひそれを参考にしてこの種の問題を中心に、共通テスト型の問題を解く練習を重ねてほしい。

#### IV 解説について

解説として「**本文解説**」と「**設問解説**」を用意している。問題を解いて答え合わせをして、それで終わりにしないで、必ずこれらを読んで本文と設問への理解を深めてほしい。

「論理的文章」の「**本文解説**」は、本文の叙述の過程をたどりつつ、全体の仕組みを明らかにしている。そして、その仕組みが理解しやすいように図表にまとめてある。これは本文を読解する際にぜひ読み取ってもらいたい内容なので、参考にしてほしい。同様に、「文学的文章」の「**本文解説**」も、本文の叙述の過程をたどりつつ、小説のテーマや登場人物の心情などを明らかにしている。これも本文を読解する際にぜひ読み取ってもらいたい内容なので、参考にしてほしい。

「**設問解説**」は、根拠を明確にしつつ、正解に至る筋道を丁寧に説明している。また、間違いの選択肢がなぜ間違いないのかもしれないと説明している。これらをよく読んで、各選択肢の適否の判断が的確だったかどうかを確認してほしい。

# 目次

## 第一部 論理的文章（評論文）

### 〔基礎編〕

\* 論理的文章（評論文）の読解について（読むとき・解くときの注意点）…………… 10

第1問 山崎正和「日本文化と個人主義」…………… 12

第2問 村上陽一郎「近代科学を超えて」…………… 21

### 〔発展編〕

\* 複数の題材を関連づけて解答する問題について（問題の傾向・解くときの注意点）…………… 30

第3問 伊藤亜紗「手の倫理」・広瀬浩二郎「触常者として生きる」…………… 32

第4問 松村圭一郎「うしろめたさの人類学」・大澤真幸「食」をめぐる葛藤の弁証法的解決…………… 44

第5問 野家啓一「物語の哲学」・野口裕二「ナラティブと共同性」…………… 55

第6問 鳥飼玖美子「歴史をかえた誤訳」・村上陽一郎「文明の死／文化の再生」…………… 67

第7問 吉見俊哉「カルチュラル・ターン、文化の政治学へ」・船曳建夫「日本人論」再考…………… 78

第8問 古田徹也「いつもの言葉を哲学する」・信原幸弘「批判的思考と情動」…………… 89

## 第二部 文学的文章(小説)

## 〔基礎編〕

* 文学的文章(小説)の読解について(読むとき・解くときの注意点).....	102
第1問 古井由吉「子供たちの道」.....	106
第2問 三浦哲郎「おおるり」.....	114

## 〔発展編〕

* 複数の題材を関連づけて解答する問題について(問題の傾向・解くときの注意点).....	122
第3問 野上弥生子「狐」・資料.....	124
第4問 車谷長吉「ある平凡」・三浦雅士「解説」.....	136
第5問 梅崎春生「庭の眺め」・「私の小説法」.....	147
第6問 久米正雄「密告者」・資料.....	159
第7問 高井有一「時の潮」・「時のながめ」・松田哲夫「解説」.....	171
第8問 阿部昭「手紙」・資料.....	184

# 第1問

## 解答・配点

問 6	問 5		問 4	問 3	問 2	問 1			設問	正解	配点
	(ii)	(i)				(ウ)	(イ)	(ア)			
	①	②	③	①	⑤	③	①	⑤	③		
	5	5	8	7	7	7	2	2	2		

## 出典

山崎正和「日本文化と個人主義」中央公論社 一九九〇年刊)の一節。途中に省略した箇所がある。

## 本文解説

本文は、武士を中心とする世の中になって平安貴族の価値観がしだいに支配力を失い、「婆娑羅」「数奇」といった新しい価値観が生まれてきたこと、それが日本の中近世文化の特色であ

る「自己の重層的な表現」につながっていったことを述べ、重層的な自己表現のあり方について説明した文章である。

本文は十の形式段落からなるが、それを便宜的に三つの部分に分けて、内容を確認していこう。

### 1 過渡期の時代(第1段落～第3段落)

筆者は、鎌倉末から室町時代にかけて「個人の技能と趣味を尊重する風潮」が芽生えてきたと言う。京都が都市化し、その住民が多様化するなかで「貴族の価値観」はしだいに支配力を失い、「武士や職人や商人といった、手を使う人びとの思想」が登場したのである。(第1段落)

それを物語るものとして、吉田兼好の「徒然草」が取り上げられる。兼好は、(注1)に「歌人(一二八三ごろ～一三五二ごろ)」とあるように、鎌倉時代の中期から南北朝時代の中期までを生きた人である。そうした「過渡期の時代の人物」である兼好は、「平安朝以来の公家的な精神の継承者」であるとともに、「新しい時代の空気を呼吸していた」人でもあった。では、平安朝以来の「貴族の価値観」と、新しい時代の「武士や職人や商人といった、手を使う人びとの思想」とは、それぞれどういうものか。

まず、「貴族の価値観」においては、「伝統的に定まった理想に従うことが美德」であり、「个性的であることはさして価値のあることではなかった。才能があること自体は悪いことではないのだが、それを汗水たらして磨いたり技藝の上達にあくせくしたりするのは、むしろ醜いことと考える傾向にあったの